



撤去から保存へと揺れた 馬溪橋ついに復旧 大分・中津市



1923(大正12)年架橋の馬溪橋(大分県中津市耶馬溪町、5連アーチ橋、橋長82.6m、橋幅6m、県指定有形文化財)

2018年8月中村まさあき撮影

大分県中津市の山国川に架かる馬溪(ばけい)橋が今年6月、2012年7月の九州北部豪雨による被災から復旧した。コンクリートの色から、上流側の高欄が全て新しくなり、橋脚の一部が補修されているのが分かる。

浸水被害が起きた直後は、住民が馬溪橋撤去の要望書を市に提出し、国土交通省(国交省)は新橋への架け替えがベストとの見解であった。しかし同橋は、市指定の文化財であるとともに国指定名勝「耶馬溪(やばけい)」の重要な構成要素である。そのため市は、熊本大学大学院シニア教授の山尾敏孝氏など専門家を交えた「馬溪橋検討委員会」を設置し、保存と撤去の両面で文化庁や県文化課と協議を重ね14年12月、馬溪橋を保存し住民の安全確保も図る方針を発表し、国交省の協力も取り付けた。

翌15年4月、国交省は地元の同意を得て、馬溪橋を残す河川改修計画を決定。市は文化庁の指導と助言を受け、名勝耶馬溪を生かした地域振興を目指し、まちづくり政策課が統括する組織横断の「市内対策会議」を立ち上げた。馬溪橋に関する治水、防災、流木、橋梁補強、地域振興などの課題に対

する国、県、市の取り組みを総合的に反映するマスタープランを作成し、地域住民参加型の観光とまちづくりを推進した。

その活動が昨年4月の、中津市・玖珠町にまたがる広大な景勝地・耶馬溪の歴史や文化を語るストーリー、「やばけい遊覧く大地に描いた山水絵巻の道をゆく」の日本遺産認定につながった。

中津市教育委員会の文化財室長の高崎章子氏は、馬溪橋について次のように語る。「耶馬溪橋、羅漢寺橋とともに馬溪橋は『耶馬三橋』と呼ばれる名橋ですが、他の2橋が県指定の文化財であるのに対し馬溪橋だけ市指定であったため、価値が一段劣るという先入観を与えていたのかもしれないと考え、県の認定へ向け活動を進め、馬溪橋も今年1月に県指定文化財になりました。今後は橋を望む絶好の場所に駐車場を整備します。馬溪橋が架かる平田地区は、大正時代の貴族院議員、平田吉胤(よしな)氏が整備した町なので、同橋を大正時代の異空間への導入路にしたいと思っています」
馬溪橋復旧の軌跡は、豪雨で被災した地域の再生事例としても注目に値する。(広報部)

中面の案内

2面 第39回大会を熊本・玉名市で開催
6面 福岡・八女市の宮ヶ原橋が復旧

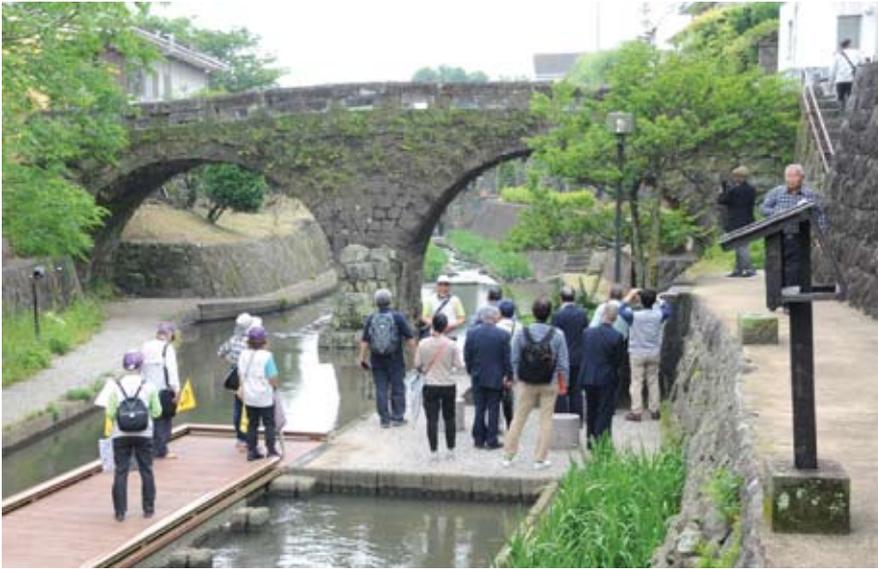
4面 熊本で「豊岡のめがね橋を守る会」発足
7面 温故石拱記~洗玉橋架設記録~(上塚尚孝)

第39回大会を熊本県玉名市で開催

地域に恩恵もたらした石橋

第39回大会が2018年5月12～13日の2日間、熊本県玉名市で開催された。玉名市民会館別館大会議室（同市岩崎）で行われた1日目の総会には会員など約56人が参加し、その後、記念講演などが行われた。2日目は玉名市周辺の石橋や石造文化財などを巡る現地見学会が行われた。（広報部）

写真提供／中村まさあき



「玉名観光ガイドの会」の案内で高瀬裏川の高瀬目鏡橋を見学

第39回玉名大会プログラム

※以下、敬称略

【1日目（5月12日）】

会長あいさつ 上塚尚孝

来賓あいさつ 玉名市長

藏原隆浩

来賓 玉名市議会議長 中

尾嘉男▽熊本県玉名地域振興

局 家入淳

総会 議長 坂本正詮

情報提供「菊池川流域の日本

遺産について」玉名市教育委員

会文化課長 松田智文

記念講演1「高瀬目鏡橋と玉

名地域の石造文化財について」

熊本県文化財保護審議会委員

前川清一

石橋クイズ

記念講演2「熊本地震で被災

した指定文化財「俣福良渡（石

橋）の解体・復元」（棟建設プロ

ジェクトセンター代表取締役 中村秀樹

情報提供「豊岡橋の文化的価値につい

て」熊本市文化財保護主幹 美濃口雅朗

会員活動報告

意見交換会（玉名温泉「ホテルしらす

ぎ」にて）

【2日目（5月13日）】

現地見学会（高瀬裏川周辺、旧玉名干

拓施設、豊岡橋）

米作りのストーリーが日本遺産に

第39回大会が開催された玉名市は熊本県北部に位置し、米作りのストーリーが昨年、日本遺産「米作り、二千年にわたる大地の記憶」菊池川流域「今昔へ水稲物語」に認定され、流域の菊池市や山鹿市、和水町と共に地域の米作り文化の発信に努めている。江戸時代は、川舟を利用して流域から高瀬町（現・玉名市高瀬）に米が集まり、川沿いに整備された港から高瀬米（肥後米）が全国の米相場が決まる大阪に大型船で送られた。その当時の町の繁栄が、高瀬目鏡橋や秋丸眼鏡橋、高瀬裏川の石垣などからもうかがわれる。

来賓を代表してあいさつした玉名市の藏原隆浩市長は、来年1月から放送されるNHK大河ドラマでは、「日本マラソンの父」と呼ばれる日本初のオリンピック選手で玉名市名誉市民、金栗四三

（かなくり・しそ）が主人公の一人として登場することも取り上げ、地域の魅力をアピールした。

関西地区での次期大会を検討

大会開催に当たり上塚尚孝会長は、多くの人々のおかげで今回の大会が開催できたことに謝意を表し、「かつて地域に恩恵をもたらした石橋とその文化、石橋の価値を守ろうと本会を結成し活動を続けてきた」と述べた。

通常総会では玉名市の坂本正詮会員が議長を務め、2017（平成29）年度の事業経過報告や収支決算報告、18年度の事業計画案と予算案を審議し、承認された。また来年度の大会開催地について、今回大会の出欠届けと併せたアンケートによると、7割の会員が九州外での開催に賛意があったことから、軸丸英頭・事務局局長は「2019（平成31）年度は会員が急増している関西地区で開催する方向で検討を進めたい」と報告した。

総会後は記念イベントが行われた。前半は、まず玉名市教育委員会文化課



松田 智文氏

長の松田智文氏が「菊池川流域の日本遺産について」情報提供を行い、「古代は平地の条里制

現地見学会

大会2日目は玉名市やその周辺に残る石橋や石造文化財を見学。



高瀬裏川の石橋群や石垣を見学



下流側に樋門が取り付けられている秋丸眼鏡橋



小岱山薬草の会による薬草料理や薬草茶のふるまい



干拓地内の水を海に出すための樋門「六枚戸」(国指定重要文化財)



豊岡橋で架設時の姿への復元を訴える森川孝一会員(中央)=熊本市北区植木町

石工仁平に関する誤りを指摘

「中世以降は山間の井手や棚田、近世以降は海辺の干拓、近代以降は沿地の暗き排水技術など、流域には米作りを支えた先人の英知と情熱による土地利用の広がりが残っている」と説明した。



前川 清一氏

記念講演1では、熊本県文化財保護審議会委員の前川清一氏が「高瀬目鏡橋と玉名地域の石造文化財について」と題して講演。玉名市の高瀬裏川に残る高瀬目鏡橋などの石橋群や石垣、石積みみの船着場跡や干拓堤防など、玉名地域の石造文化財について紹介。
また前川氏は、肥後の石工の祖といわ

震災被害石橋の復旧を報告

「仁平について、墓がある山鹿市菊鹿町の光照寺の過去帳の記録を紹介し、「現在の大分県日田市上津江町川原広川から菊鹿町の原口家の世話により肥後に移り住んだ」と指摘。そして、仁平に関する誤った記録として、長門王行著『菊池勲功記』内の「益城郡上嶋村三九郎倅仁平」、徳丸秋因著『山鹿郡誌(未完)』内の「仁平肥前二赴キ石虹ノ法ヲ伝習」、元庄屋原口五二郎著『砕玉談』明治28年内の「岩永仁平ナルモノ八南郷黒川の石虹成就セシヲ嘉賞シ細川政府ヨリ岩永ノ苗字を賜フ」を挙げた。

後半は、軸丸事務局長の進行による「石橋クイズ」に続き、本会の調査研究部長で(株)建設プロジェクトセンター代表取締役の中村秀樹氏が演壇に立ち、記念講



中村 秀樹氏

演2「熊本地震で被災した指定文化財二俣福良渡(石橋)の解体・復元」と題し講演した。美里町の二俣福良渡目鑑橋は、熊本地震で壁石が大きく崩落するなど被害を受けたため、一度解体し復元する工事が行われた。1118個の石材を全て確認し、ひび割れた石材はつないで使用、欠損した石材は新材に取り換えるなど、施工の全工程が紹介された。

「文化財の復旧は被災前の状態に戻すことが原則。その一方、伝統工法で耐震性と耐久性を高める工夫も行った」と中村氏。今後の検討課題として、災害時に国の支援を受けやすい管理体制の構築、石橋の健全度の把握、文化財関係者と道路管理者の意見



美濃口 雅朗氏

交換や研修の必要性などを指摘した。続いて、熊本市文化財保護主幹の美濃口雅朗氏が「豊岡橋の文化的価値について」情報提供を行い、同橋が1802(享和2)年に築造された熊本県内現存最古の石造アーチ橋であり、輪石がだ

ぼ石で連接され、要石のみ長手積み(リブ構造)であること、西南戦争(1877年)戦跡の構成要素である一などの特徴を紹介。(関連記事を4面に掲載)
美濃口氏は石工仁平の墓についても言及し、墓石の形態や塔身のみ安山岩で他は凝灰岩であるなどの特徴から、「仁平を師と仰いだ門弟が後に、墓を荘厳化した可能性がある」と指摘した。

架設当初の姿への復元目指し 熊本で「豊岡のめがね橋を守る会」発足

熊本県内で現存最古の石造アーチ橋「豊岡橋」（熊本市北区植木町）を架設当時の姿に戻し、後世に残したいと願う人々が集まり、「豊岡のめがね橋を守る会」（谷口憲治会長）が今年7月に発足した。同橋の価値、そして今後の活動について、事務局の森川孝一（会員）（熊本）に聞いた。（広報部）

写真提供／森川孝一



豊岡橋の downstream 側。輪石が小さな丸いだぼ石で連結されている。壁石の積み方が左右異なり、輪石上部はコンクリートを使って改変されている



豊岡橋の upstream 側。修復が繰り返された壁石



要石の列だけが長手積みで、中央の1石のみ布積み

豊

岡橋（豊岡の眼鏡橋）は、中谷川（菊池川水系）に架かる径間11.2mの単一アーチ橋。上流と下流側の各要石に架設関係者の名が刻まれ、架設年が1802（享和2）年10月であることが確認できる。架設された場所に現存する石橋としては熊本県内最古というだけでなく、同橋は注目し値する特徴を有している。

まず、輪石が川原石のような丸いだぼ石で連接されている点。こうした特徴は、豊岡橋を架設した石工が、肥後で初めて石造アーチ橋を架けたとされる石工、仁平の技術を継承していることを物語る。1774年ごろに仁平が試作したとされる洞口橋（1994年復元）や御船町の門前川橋（1808年）など、県内最古級の石橋に共通の特徴といえる。

次に、要石のみが長手積み（リブ構法）で、1石のみ布積みである点。一般に石橋の輪石は、布積みか長手積みかのどちらかであるのに対し、豊岡橋には特徴的なアーチ構法が取り入れられている。

また、同橋は江戸期、藩内最大の米蔵が置かれた高瀬町（現・玉名市高瀬）と熊本城下を結ぶ高瀬往還の田原坂下に架けられている。1877（明治10）年の西南戦争では田原坂で政府軍と西郷隆盛率いる薩摩軍による激しい攻防が繰り広げられ、戦争の勝敗に大きな影響を与えたことから、田原坂に続く同橋は西

南戦争戦跡の構成要素となっている。

豊岡橋は交通量の増加に対応するため1960年に路面のかさ上げとコンクリート床版を使用した拡幅がなされている。さらに、度重なる水害を経て「貫性を欠いた補修が繰り返された結果、壁石が下流左岸側のみ谷積みで他は布積みとなるなど、熊本市指定有形文化財でありながら、現状は非常に景観を損なった状態で保存されている。森川孝一氏はそれを「人為的な損傷」と考えている。

森川氏は、そうした状況を変えたいという思いで昨年、本会会員となった。また、市議会議員にも現状を訴え、熊本市議会的一般質問において議員がこの件を取り上げ、市経済環境局長も同橋の現状を認識する状況になっている。

今年、「豊岡のめがね橋を守る会」ホームページを開設。そして7月30日に、熊本市北区植木町の谷口憲治氏を初代会長に迎え、正式に会が発足した。同会は、「原型の重要性」を訴え、豊岡橋を架設当時の姿に復元することを目指し、活動を推進している。

豊岡のめがね橋を守る会

会長 谷口 憲治 会員11人

事務局 森川 孝一

〒865-0066 熊本県玉名市山田2039-9-303

電話0968-74-2692 携帯080-1741-6971

メール k.morikawa0703@kpe.biglobe.ne.jp

ホームページ

http://www.7b.biglobe.ne.jp/~toyooka_meganebashi/



縁石（ふちいし）の下4段ほどの石材が一度取り外され、積み直された下鶴橋（今年8月5日撮影）

熊本地震からもうすぐ2年半 復旧進む被災石橋

熊本地震発生からもうすぐ2年半。被災した石橋の復旧作業が進められている。上益城郡御船町の下鶴橋、宇土市の船場橋の状況を紹介します。

写真提供／中村まさあき

下鶴橋《竣工》 ＝上益城郡御船町



上流右岸側の下鶴橋の高欄。左は震災で崩落した高欄（2016年5月2日撮影）。右は一部の手すり石とそれを支える束柱（つかばしら）が新材に交換され復旧（今年8月5日撮影）



上流左岸側の下鶴橋の高欄。風化や損傷した束柱が修復され、円筒形の手すり石の下に据えられた。路面の修復により、震災までアスファルトの下に埋もれていた束柱の下の縁石が姿を現した（今年8月5日撮影）



雨の中での船場橋の解体作業（今年5月6日撮影）

船場橋《施工中》 ＝宇土市



上は、解体作業が終わった船場橋跡。復元は来年度を予定している（今年5月15日撮影）

左は、足場が組まれ、輪石の下に支保工が入った船場橋（今年5月6日撮影）

熊

本地震で被災した石橋の復旧が進められている。

高欄の一部が損壊し壁石に亀裂が入った上益城郡御船町の下鶴橋（町指定文化財）は、要石上の4段ほどの壁石を外して積み直され、高欄の復旧が行われた。円筒形の手すり石を支える束柱（つかばしら）は、風化が進んだものや損傷を受けているものは修復が行われ、新たに作製して取り換えられたものもある。

宇土市の船場橋（市指定文化財）は、地震で輪石に亀裂が入り、壁石が外側に膨らみ、高欄が損壊、取付護岸の石垣が崩落した。宇土市は先に取付護岸の石垣の復旧を行い、石橋を一度解体して復元する計画を発表した。橋が架かる船場川の水は農業用水として利用され、夏から秋にかけて水位が高くなるため、まず今年5月に解体工事を行って石材を保管し、来年度に復元する手順となった。

これまで復旧が終わった石橋は次の通り。高欄が倒壊した熊本市中央区の明八橋、菊池市の永山橋（県指定文化財）、下益城郡美里町の馬門橋（町指定文化財）と大窪橋（町指定文化財）。取付護岸の石垣が崩落した菊池市の立門橋（県指定文化財）。左岸石垣が大規模に崩落した御船町の八勢橋（県指定文化財）。右岸壁石が崩落し輪石がむき出しとなった美里町の二俣福良目鑑橋（町指定文化財）、そして御船町の下鶴橋。（広報部）

震災復旧工事中の通潤橋＝熊本・山都町 大雨で壁石の一部が崩落



熊本地震の後、漏水が発生した熊本県上益城郡山都町の通潤橋（1854年架橋、国指定重要文化財）は、石造の通水管をつなぐ漆喰（しっくい）の詰め替え作業や、地震により外側に膨らんだ箇所（縁石と壁石（石材3段）の積み直しなど）の復旧工事を進めていたところ、大雨により5月7日、上流右岸側鞆石垣の上部が長さ約10㍎、幅約1㍎、高さ約4㍎（石材5段ほど）にわたって崩落した。

通潤橋史料館の石山信次郎館長は、崩落について次のように語る。

「8日の朝に現場を確認したところ、崩れた石材が土手や川の中に散らばっ



大雨により上流右岸側の鞆石垣の上部が崩落した通潤橋
＝今年5月10日、写真提供／石山信次郎

ていました。石材は1個の重さが2000〜3000㍎はあると思いますが、12日頃からケーブルクレーンを使って、川に落ちた石材も含め94個が回収されました。通潤橋は3次元測量されているのでデータと照合すれば、落ちた石材も元の位置に戻せるはずだと思っています」

文化庁や山都町は崩落の原因を調査しているところだが、熊本日日新聞は次のように報じている。

「通潤橋の崩落した箇所は、地震前の2013年にはすでに約20㍎外側に膨らんでおり、16年の熊本地震でさらに15㍎外に膨らんだ。災害復旧工事で国庫補助を受けるには、震災前の状態に戻すことが条件。もし架設時の状態に戻す場合は広範囲に一度解体を行った後に石材を積み直す必要があり、その際に構造バランズが崩れるリスクがある。そのため町は文化庁との協議を経て、13年当時の20㍎外側に膨らんだ状態に戻すよう壁石などを積み直した」

崩落箇所はその後、金網で覆いモルタルを吹きつけるなど、被害拡大を防ぐ措置が講じられている。今後は、崩落で露わになった通水管下の構造解明と、大雨で崩落することのない復旧方法の検討が望まれる。（広報部）

6年前の豪雨により被災した「ひふみよ橋」 宮ヶ原橋が復旧＝福岡県八女市

2012年7月の九州北部豪雨により被災した福岡県八女市の星野川に架かる4連アーチ橋「宮ヶ原橋」は、大規模な河道拡幅を含む石橋保存工事が終わり、今年3月に完全復旧した。石橋保存に力を尽くした「八女上陽の『ひふみよ橋』を守る会」（久間一正会長）の会員で「ほたると石橋の館」（同市上陽町）館長の内田理絵氏に復旧の感想を聞いた。

今年3月、5年8カ月をかけた復旧工事が終わり、八女上陽の「ひふみよ橋」が完全復活しました。星野川の上流から4橋のアーチが順に一つずつ増えていく「ひふみよ橋」は、どの石橋が欠けても「ひふみよ橋」にはなりません。約6年前、川幅の広い下流に架かる宮



宮ヶ原橋の下流側。高欄復旧後のたびたびの雨でセメントが流れ、その跡が白く壁石に残ってしまった 写真提供／内田理絵



中の島の右が分水路と宮ヶ原公園橋
写真提供／福岡県八女県土整備事務所

ヶ原橋は完全に水没し、辺り一面が泥水の海のように、「橋は流された」と誰もが思いました。ところが、水が引いた後、高欄や中詰め土砂は流失したものの、本体はしっかりと残っていて、壮健な石橋の姿を見せてくれました。そのときのように、今でも忘れられません。

ただ、残念な思いもあります。それは、工事により中の島の護岸の中に宮ヶ原橋の輪石3〜4列が埋まったこと、高欄復旧に地元の八女石灯ろう協同組合が参加できなかったこと、高欄復旧工事後のたびたびの雨でセメントが壁石を流れ、その跡が白く残ってしまったことなどです。

とはいえ、河川改修計画により分水路が新設されたことで、宮ヶ原橋は保存・復旧され、星野川の流下能力も向上しました。石橋を未来へ残したいという私たちの思いに賛同し、ご協力くださった皆さまに感謝しております。（内田理絵）

洗玉橋架設計録

福岡県八女市を流れる星野川に架かる4橋の石橋は、「ひふみよ橋」の名で親しまれている。その最上流の同市上陽町北川内地区に架かる洗玉橋に関する記録の一部を紹介したい。

熊本県へ委員3人を派遣

洗玉橋の辺りは当時、「上妻下妻郡北川内村」で、同橋の架設推進役は村長の江口半蔵氏。村長が郡役所へ送付した書類は、表題に「明治廿(二十)五年四月 石眼橋架設工事記録」と墨書きされ、そのつづりは286枚に及ぶ分厚さ。

まず表紙に「熊本県八代郡種山村大字西原 橋本勘五郎二問合せタル一件」と、いきなり石工、勘五郎が登場する。「石眼橋ヲ架スルニハ充分ノ取調ヲ必要ナリト協議一決シ客(去)年三月廿四日ヨリ熊本県へ委員三名ヲ派遣シ 先ツ国道筋 迎春橋ヲ始メ熊本県山鹿郡高井川・栗瀬ノ両橋 熊本市内ニハ明八橋・明治(十)橋其他沿道筋ノ小橋ヲ視察セシメタルニ 迎春橋ヲ除ク分 熊本県内ノ石眼橋ハ大概橋本勘五郎一族ノ関係セサルハナキ由ニテ、熊本市以南ニハ石工橋本勘五郎ト尋ヌレバ 小兒ニ至ル迄知ラヌ者ハナキ位ナル由ニテ最モ

有名ナル者ナリ」。橋本勘五郎は当時から、それほどに高名な石工だったのか。

「一 郡村不詳 五郎力滝ノ水吹キ上ケ石眼橋ノ如キハ 有名ナル橋梁ニテ勘五郎ノ兄某棟梁ニテ架シ 旧藩時代ヨリ数万石ノ畑ヲ水田ト為シ灌漑スル由ニテ 我北川内ニ於テモ此橋ヲ見タル者数名アリテ 実ニ驚クヘキノ橋梁ナル由」と、3人の委員は通潤橋まで視察している。



■おんこせつこうき■
温故石拱記
上塚 尚孝

「一 橋本勘五郎ハ農商務省ノ御用ニ依リ東京ニ昇(上)リ 内務省ニ移リ数年間雇入れト相成リ 夫ヨリ引続キ東京府庁ニ転シ東京市内ヘモ重立チタル橋梁三四ヲ石眼橋ニ架シ替エタル趣ニ有之由ニ候」と、勘五郎

の東京での仕事を報告している。

勘五郎を同行して帰村

「一 客年三月当村ヨリ出張シタル委員八勘五郎ヲ同行シテ帰村致セリシニ依リ 実地ニ就キ架橋場所及ヒ石ノ生(性)質迄検査致サセタルニ 場所並ニ

石ノ生(性)質共随分適スル旨答ヘタリ マタ石眼橋ノ輪ハ五分ヨリ三分五厘迄ヲ良シトス 最モヨロシキハ四分輪ヲ以テ第一トスト答エタリ。すなわち、径間を10とした場合、拱矢は5.3.5がよく、拱矢4が最良と述べている。地形の状態や諸条件から答えは異なると思うが、ここには、勘五郎の貴重な証言が記録されている。

「一 勘五郎ノ履歴ハ熊本県庁ニ問合スレハ充分判明スル由ニ有之候」

「以上述ル処ノ経験アル者ニ付 当北川内村は勘五郎ニ及フ者ハ他ニ有ル間敷ト深く信用致シ居レハ 同人ニ請負セアリタキ希望ノ至リニ御座候」。郡役所は、江口村長の意を汲み、橋本勘五郎を洗玉橋架設工事責任者に決定した。

勘五郎が描いた洗玉橋の完成予想図を見ると、「渡り拾吉間の五分円」。つまり径間は19.8^寸で、拱矢はその半分の9.9^寸。ちなみに下橋こと支保工をこしらえた大工は、種山村の北の山を超えた吉野村大字大野の吉沢大七。大七も詳細な図面を描き残している。

石工衆は責任者が橋本勘五郎70歳補佐役が二男弥熊(後に源平と名乗る)。他に種山村の前田文平や西隣の立神村から本田茂三郎、東隣の下岳村からは萩本卯作ら9人が参加した。勘五郎が署名捺印した「工事落成届」も残っている。「明治廿六年五月二日」付で、宛名は「上妻下

妻郡長の蒲瀬瀧干殿」

橋本勘五郎最後の石橋

1893(明治26)年に落成した洗玉橋は115歳の長寿橋だが、受難の時代もある。昭和初期、木材を積んだ荷馬車の積み荷が接触し、親柱などが崩落して土手に埋もれた。2001(平成13)年に掘り出された親柱には、頂ぎに擬宝珠(ぎぼし)、その下方四隅に逆蓮華(れんげ)花弁が刻され、架設年の刻字は車両の接触で一部が摩滅している。この親柱は現在、束柱(つかばしら)と共に北川内公園(同町北川内)に保存されている。今の洗玉橋の高欄は、1995(平成7)年に付け替えられたものである。

洗玉橋は橋本勘五郎が最後に架けた石橋として現在も残っている。各石材の重みと石材同士の摩擦力だけで橋全体を支える「空積み」という江戸期以来の工法ながら、2012(平成24)年の九州北部豪雨にも耐えてみせた。かつて橋本勘五郎に架設を依頼することにした、地元関係者らの目は確かだったと言えるだろう。

※文中の「」内は旧仮名遣いそのままにしている



架設時の洗玉橋の親柱(筆者イラスト)



上村 克弘「盛秋」
(紅葉と笠松橋)
熊本県八代市東陽町上久木野

石橋のまな風景

写真は第12回八代市「坂本・東陽・泉」町観光と四季写真コンテスト(熊本県八代市、泉町観光協会、熊本日日新聞社主催)で今年3月、グランプリに輝いた上村克弘さん。同市東陽町IIの「盛秋」。鮮やかな葉の色と秋空が石橋にマッチし、秋らしさをうまく表現している」と評価された。作品は熊本県八代市東陽町の東陽石匠館に展示されている。(広報部)

いつも風景のいいところをカメラ

に収めようと、チャンスを狙っています。東陽町山村活性化協議会の炭焼き部会に参加していますが、会の炭焼き窯へ向かう途中、笠松橋近くのモミジが昨年より鮮やかに色付いていると思い、その翌日に撮影しました。笠松橋は近くのイチョウが黄金色になる時季もいいため、気になる撮影スポットです。

退職まで長年、郵便局に勤務していたこともあり、写真コンテストでグランプリをいただいた記念に、その写真を切手に使いました。
(2017年11月15日撮影、文II上村 克弘)

来年度大会を記念大会に

1980(昭和55)年に第1回大会を開催し、来年度は「節目」の第40回大会の年を迎える。事務局では近年、関西在住の会員が増加していることを踏まえ、関西地区での開催を視野に会員アンケートを実施。会員の7割が九州外での開催に賛意があったことなどを第39回総会で報告(2面に関連記事)。

その後、大会準備委員会を開いて宿泊費用や移動時間などの情報を集め検討した結果、次回大会は記念大会として5月12日(日)・13日(月)に京都市で開催し、1日目に総会など、2日目に石橋見学会

第40回大会は京都市で開催
2019年5月12日(日)・13日(月)

- 13日(月)は15時ごろ解散の予定
- 往復の交通手段は各自手配を

事務局は会員から宿泊の予約を受け付け、ビジネスホテルなどを手配する予定だが、京都市への交通手段は、個人が割引特典などを活用する方が割安になるため、会員各自が手配して総会の会場で集合する方向で計画を進めている。

なお、2日目はマイクロボスなどに分乗して石橋を見学、昼食を取り、JRR京

を行う2日間の日程を決めた。例年の開催は土曜・日曜日だったが、次回大会は日曜・月曜日となる。

都駅で15時ごろ解散の予定。1日目の総会会場や懇親会会場、2日目の現地石橋見学会のルートなどは今後、大会準備委員会において検討が進められる。次回大会に関する提案などは事務局のメールアドレスへ。
jim@ishibashi-mamorukai.jp



上は王子橋、下は円通橋
写真提供/軸丸英頭

日本の石橋を守る会

～石橋とその文化を大切に～

会報93号(通算) 2018(平成30)年9月10日発行

代表者 会長 上塚 尚孝
事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2
通潤橋史料館内 ☎0967(72)3360
HP <http://www.ishibashi-mamorukai.jp>
BBS <http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/>

編集後記

大分県中津市の山国川に架かる「馬溪橋(橋長82・6m)」を訪れると、川幅が広く感じられ、6年前の豪雨の際の激流によくぞ耐えられたものだと思心しました。ただ、その強さゆえに浸水被害の元凶のように扱われましたが、その後、石橋の保存と安全・安心の暮らしの両立を図る取り組みを行政と住民が進め、石橋を生かし、観光や地域の振興を推進する道を歩んでいます。

一方で昨年、豪雨被害が起きた大分県日田市の大肥橋は現在、撤去される方向に進んでいるようです。被災の状況や現地の事情は異なるでしょうが、馬溪橋の復旧を参考にしてもいいのですが。(会報担当 中村まさあき)